

‘The Secret Sharer’ における 分身のモチーフを読み直す

野口 祐子

序

コンラッド (Joseph Conrad) の ‘The Secret Sharer’ はどんな作品かと問われれば、「分身のモチーフを用いた、通過儀礼をテーマとする短篇小说である」というのが、一応は無難な答えだろう。通過儀礼については、‘the starting-point of a long journey’, ‘the threshold of a long passage’ といった表現が冒頭から目につく。そしてそれらは物語の語り手が船長として初めて経験する航海を、彼の人生の新たな一步と重ね合わせ、主要なテーマとして前面に押し出している。また分身のモチーフについても、もう一人の主要人物であるレガットと船長の分身関係を示唆する表現が多用されていて、見落とししようがない。

そのように明快なテーマとモチーフを持った作品であるにもかかわらず、これまでその読み方については、互いに矛盾し合う様々な解釈が示されてきた。そのように多様な解釈を生み出す主な原因は、レガット (Leggatt) の人物像をどう捉えるかについて、読み手によって意見が分かれる所にあると考えられる。レガットは分身であると言明されているし、彼のことを伝える船長の語りには表現上の迷いなど微塵もない。何ら言語上の曖昧さを生み出さない語りであるのに、レガットをどんな人間と受け取ればよいのか、どんな影響を船長に与えるのか、解釈が分かれるのである。

そこでこの小論では、冒頭に提示したこの短篇についての定義をもう一度検討することから始めたい。「分身のモチーフを用いた、通過儀礼をテーマとする短篇小说」という定義が誤りだと言うつもりはない。ただ、

分身のモチーフを自明の前提と見做すことによって成り立つ解釈とは異なる角度から、レガットと語り手の関係を捉え直すことによって、従来の解釈では見えなかった意味が見えてくるのではないか。また、通過儀礼のテーマを物語に沿ってなぞる解釈においては隠蔽される矛盾や複雑さに光を当てることができるのではないかと考えるからである。

I 言葉の反復が産み出す過剰性

In a novel, what is said two or three times may not be true, but the reader is fairly safe in assuming that it is significant.¹⁾

この Miller の言を待つまでもなく、小説の中で繰り返し現れる表現には、読者は当然注目すべきだろう。では二、三度と言わず、もっと頻繁に繰り返される場合はどうか。その場合は、繰り返される表現やイメージがテキストの前景へと顕在化され、読者は否応なくそれらを意識することになるだろう。

小説の中で、ある特定の語句やイメージが繰り返される時、大きく分けて三つの理由が考えられる。

一つは、連続して、或いは反復的に生起する行為や現象を描くために用いられる場合。Dickens の *A Tale of Two Cities* を例にとれば、バスターイーユ監獄を群衆が襲う日の場面で、“Deep ditches, double draw-bridge, massive stone walls, eight great towers, cannon, muskets, fire and smoke” という、事物を列挙した一文が、一ページ程の間に少しずつ変化しながら五回繰り返されている²⁾。これは難攻のバスターイーユへと群衆が長時間にわたって攻め込もうとしている様子を彷彿とさせる。

第二に考えられるのは、連続した、或いは反復的な行為に関わらず、作者が強調したい事象を読者に強く印象づけるために繰り返す場合。繰り返しを愛用するディケンズの同作品から一例を引こう。この小説において、暴徒と化した群衆は人々としてではなく、荒れ狂う海、逆巻く渦、洪水、大波として描かれる。そのようなイメージを繰り返し用いることによって、

集団的な示威行為や暴動に身を任せる群衆というものに対して、読者に一定の眼差しを向けるよう促していると考えられる。

もう一つ考えられるのは、作者、或いは語り手、或いは登場人物が取りつかれている思考、感情の表れとして、特定の語句やイメージが繰り返される場合。これもディケンズに例を求めるならば、同小説で、Sydney Carton が愛する者のために自らの命を犠牲にする決意を固めた夜、パリの街をさまよい歩く場面で、彼の脳裏には、むかし父の埋葬の際に聞いた死者を弔う聖句が幾度も去来する。テキストには、その都度その聖句が引用される³⁾。そしてそれは結末において、彼がギロチンにかけられた瞬間にも繰り返される。ただし最後の繰り返しは彼の脳裏をよぎったものとも取れるし、彼の死への弔いとして語られているとも考えられるが。

厳密に分類すればもっと細分化できようが、大きく分ければ繰り返しはその性質によって、およそ上記のような三様に分けられるだろう。さてそれでは次に、この小論の対象である ‘The Secret Sharer’ に顕著に見られる繰り返しについて、それがこの三つのうちのどの性質を帯びているのか考えたい。

‘The Secret Sharer’ の中には分身を表す語句が非常に頻繁に現れる。先に触れたように、これまでなされてきた解釈は、主として分身のモチーフを中心に据えて船長とレガットの関係を論じるもの、またそれを前提にして、通過儀礼を経た主人公の精神的成長という主題を読み取るものが一般的であった。分身を表す表現が繰り返される理由を上記の第二の場合に求めた読み方である。即ち、分身のモチーフはこの物語を読む上で重要であるから、強調するために繰り返されているという捉え方である。Mudrick もその一人であるが、彼はこの作品での強調のしかたが余りにもあからさまだとして批判する。そして、いかにも “symbol hunting” を誘うような表現に、尤もらしい神話的あるいは心理学的説明をつけて、深みのある物語だと悦に入る批評の傾向にはうんざりだと述べている。そんな批評の一例として Guérard の解説を引用した後で、Mudrick はこう続ける。

Who could fail to predict every item of the depth-psychology par-

aphernalia that will tidily turn up? And who could possibly miss, on the most inattentive first reading, Conrad's oversimplified, imposed mythical structure, symbol to character in the crudest one-to-one relationship, nailed into the flesh of the narrative in almost every sentence? Mr. Guérard thinks that we may be unaware of Leggatt's function as the captain-narrator's "ghostly 'double'".⁴⁾

Mudrickによれば、コンラッドは分身に関わる表現を繰り返すことによって、解釈のための“coarse, obvious, and superabundant clues”⁵⁾を与えていることになる。Mudrickはテキストに現れる繰り返しをあくまでも作者による強調の意図の表れと理解した上で、このような批判を展開している。だが本当にそうだろうか。作者が読者に分かってほしいがために念を押しているのだろうか。

しかしその繰り返され方は、Mudrick自身指摘するように尋常ではない。‘The Secret Sharer’は50ページほどの長さの、比較的長い短篇と似た規模の作品なのだが、その中で、分身を示す表現が40回以上も現れるのである。ちなみに“my double”は“double captain”, “my secret double”を含めて16回, “my secret self”, “my other self”, “my second self”は合わせて10回, 他に“identical”, “dual” “secret sharer”, “secret partnership”, “being in two places at once”などが、いずれも船長とレガットの関係を表すのに用いられている。

Mudrickの批判から離れて、これほど執拗に繰り返されること自体に何らかの意義があるはずだとは考えられないだろうか。つまりMudrickの批判の前提となっている繰り返しの意図とは異なる意図を持って繰り返されているとは考えられないかということである。分身関係が成立していると読者に一旦納得されたならば、その後は何度も重ねて念を押す必要はないし、ましてや40回以上も繰り返すのは異常だ。その異常さに注目したいのである。読者は注意を喚起されるにとどまらず、むしろそのしつこさに違和感を覚え、なぜここまで繰り返すのだろうかと言ひむべきだろう。そしてこの過剰な繰り返しは、分身関係が、強調されるべき重要な真実で

あるからではなく、そこにはもっと他の理由があるはずだと考えるべきだろう。

II 分身という虚構

そもそも分身に関わる表現を多用するのは語り手の船長なのだが、それはレガットが明らかに彼の分身的人物と認められるからなのか。その点から検討を始めたい。

セフォラ号の船長がレガットを捜して語り手の船にやってきた時、その船長が語り手とレガットの相似に気づいたに違いないと、語り手は言う。

... I believe that he was not a little disconcerted ... by something in me that reminded him of the man he was seeking — suggested a mysterious similitude to the young fellow he had dis-trusted and disliked from the first.⁶⁾

セフォラ号の船長がレガットを嫌っていたために、語り手は表立っては平静を装いながら、頭から船長に敵対的な姿勢を取る。語り手はレガットと自分を重ね合わせた見方しかできなくなっている。だからレガットと自分と両方を知っている者なら二人の相似に気づくはずだと信じて疑わない。しかしセフォラ号の船長がそれに気づいたかどうかは結局分からないし、似ているというのは語り手の思い込みにすぎないのかもしれない。

また船長以外に船の中でレガットの姿を見た者はいない。だから彼を船長の分身と認める者は、船長以外にはいない。とりわけ見落としてはならないのは、分身関係の当事者であるはずのレガットが、二人が似ているとも分身であるとも言わない点である。

実際、この語り手は多分に主観的なものの見方をする人物として読者の前に現れる。彼が事物を自分の見たいようにしか見ない人物であることは、作品冒頭の語りに既に明らかである。物語の始まりにおいて、彼は甲板の上に立って周りの風景を観察しているのだが、彼が陸と空と海に向ける眼

差しは、外界を外界として認めるのではなく、それらに自分の孤独と不安と矜持をひたすら投影するのであった。ここで紙面を割いて詳しく論じることがはしないが、彼のものの見方や判断の仕方から伝わってくるのは、彼がかなりの程度において「信頼できない語り手」だということである⁷⁾。そんな彼がレガットのことを何度も我が分身として言及しているからといって、単にそれを理由に、彼らが分身関係にあるのだと断ずるわけにはいかない。

とすれば、語り手が分身に関わる表現をしつこく繰り返すのは、レガットが明らかに彼の分身的人物と認められるからではなく、分身であると見做したい願望に取りつかれているからではないか。つまり語り手によるこの繰り返しは、前章で挙げた繰り返しの三つ目の事例に当てはまるだろう。レガットが自分の分身であってほしいという願望が語り手のオブセッションとなって、分身としか見られなくなっている。語り手はこの場合も、彼の語り特徴的な精神的視野狭窄に陥っているのである⁸⁾。

この点に関して注目したいのは、語り手のレガットに対する呼び方である。レガットの人物像はこれまで解釈者ごとに異なるアクセントを付与されて論じられてきた。そのいずれもがレガットを論じる際にレガットという名で言及し、一個の個性を持った人間として論じてきた。しかしテキストでは実際に“Leggatt”という名が現れるのはたった二度で、一度は彼が“My name’s Leggatt” (99) と語り手に自己紹介する時、あと一度はレガットが身の上を語り手に聞かせる話の中で、セフォラ号の船長がレガットに向かって言った言葉 “Mr. Leggatt, you have killed a man” (103) だけなのである。出会いの直後から、語り手は彼のことを “my double” と呼びはじめ、固有名詞で呼ぶことは決してない。

この語り手のレガットへの対し方と、レガット固有の人間性を論じる批評におけるレガットの扱い方には、ずれがあるように思われる。語り手が決してレガットという名を口にしないのは、レガットと名乗る男を、固有の名を持ち、固有の人格を持った人物と見做していないことの表れだろう。見ず知らずの他人、自己に対する他者という存在であるはずの男を、語り手は他者と見做したくないから、その名前では呼ばないのである。レガットのこととは、彼の話した言葉がテキスト上に直接表れていると考えられる部

分の他は、語り手がレガットについて見たもの、というより見たかったものを通してしか読者には分からない。つまりレガットという人物の存在は語り手の主観に包まれていて、語り手というフィルターの向こうに在るのである。そんな存在を、独立した人間性を持ったレガットという男として論じるのは難しいはずだ。いくらレガットをよく理解しようと欲しても、彼を頭から自分の分身として扱おうとする語り手の視野狭窄に読者の理解は阻まれるからである。

分身に関する表現を語り手が繰り返すことについて、読者はそれによって分身関係を一層自明のこととして受け入れるどころか、かえって、わざとらしさ、語り手の作為といったものを意識すべきだろう。このように、分身を指す言葉はテキストの中で執拗に繰り返されることによって、読者の注意を、言葉の指し示すものから言葉そのものへと転じさせ、さらにその言葉を繰り返す語りの行為そのものへと向かわせる。その語りの行為から読み取れることは、上述したように、夜の海からやってきた見知らぬ男を自らの分身として受け入れたいという、語り手の切実な願望の現れである。そればかりではない。語り手は、主観に基づいて物事を解釈し、自己を正当化する物語を紡ぎ出さざるをえない人間の姿を体現してもいるのだ。

語り手は船長という立場上、船員たちへも彼を取り巻く自然へも、注意深く、かつ安定した眼差しを向けねばならぬはずである。しかしながら、テキスト冒頭の描写から伝わるのは、この語り手が自分の主観世界から船員たちを締め出し、また自然物も彼にとって空々しい奇妙なものとし映らず、空の星々が自分を見つめると言っては苛立つ、そんな語り手の、外界に対する姿勢である。どうもこの語り手は、自分の殻の中、主観世界の中へと閉じこもろうとばかりしているようである。その殻がレガットの出現によって破られるというような単純な話ではない。レガットはあくまでも、語り手の主観世界が必要とした分身という虚構を担う者として、語り手に受け入れられるのであって、その世界の自己完結性を破る存在としては機能しないのである。

The Sunday quietness of the ship was against us ; the stillness of air and water around her was against us ; the elements, the

men were against us — everything was against us in our secret partnership; time itself — for this could not go on forever. (123)

この物語において分身関係とは、人間界にも自然界にも、また時の流れにも背を向けた語り手の主観世界の中でのみ育まれた虚構なのである。その世界の中では、倫理的問題も至って単純な事柄として扱われる。語り手によればレガットの犯した殺人も、次のようになる。

It was all very simple. The same strung-up force which had given twenty-four men a chance, at least, for their lives, had, in a sort of recoil, crushed an unworthy mutinous existence. (124-125)

これは何とも合理的な説明だが、レガットの行為を“strung-up force”と表すことによって、行為の主体としてのレガットを隠蔽する表現となっている。語り手はレガットを自室に匿うだけでなく、語りの中でも表現のしかたによって彼を匿っていると言える。

分身関係は客観的真実としてあるのではない。語り手の主観世界の中で必要とされたがゆえに生み出され、物語の中で語り手によって紡ぎ出されたものなのだ。だから繰り返しということに関すれば、冒頭から孤独と不安を痛切に感じていた語り手が、分身という虚構を必要としていたからこそ、分身という言葉を繰り返し用いるのだと言える。

Ⅲ レガットを反復する語り手

語り手はレガットのことを何度も“my double”とか“my second self”とか“my secret self”と呼ぶのであった。その場合、主となる存在、第一の自我として前提されているのは、語り手自身である。ところが反復という観点から見れば、ふたりの関係は逆転する。語り手の影であるはずのレガットは語り手から何ら影響を受けないし、語り手を真似ること

もない。彼は語り手に匿われている間中、ただひたすら彼自身の意志で、動き、あるいは静止しているだけである。対照的に語り手は自分の分身であると見做すレガットの存在によって、徐々に振る舞いに変化を生じ、レガットの過去の行為を真似るようになる。

語り手はレガットが自分に欠けている能力や、自分の人間性の抑圧された部分を照らし出してくれると考えているらしいのだが、その点だけを見れば、語り手はレガットという分身を得て、自らの内面を見直すことができた結果、精神的成長を遂げたということになる。だが、ことはそう簡単に済まない。注目すべきは、語り手がレガットの過去の行為を反復することによって、語り手自身に光を当てるだけでなく、元のレガットの行為自体にも光を当てることになるという点である。そしてその光は、皮肉にも語り手が解釈したのとは異なる意味を照らし出すことになるのである。この点でも、レガットの物語について語り手が読み取りたい意味を、テキストが裏切っているのだ。

その最たる例として、コーリン島への接近という事態を取り上げよう。この場面は語り手である船長の試練と、それをくぐり抜けての精神的成長を劇的に示す場面として、頻繁に取り上げられてきた。その場合、よく指摘されるのが、コーリン島への異常接近という危機的状況とレガットが経験した嵐との対応関係である⁹⁾。つまり語り手は緊急事態を自ら作り出し、それに面と向かうことによって、レガットの経験を内面化することができ、その試練に耐えた結果、成長することができたと論じられるのである。

確かに、ここでの語り手は毅然とした態度で部下に命令を下し、傍で一等航海士にわめき騒がれても、決断を揺るがそうとしない。極限状況に身を置くことが通過儀礼の成就には不可欠であり、その意味ではこの異常接近は納得できるものである。ここで語り手が得た収穫は、そのような状況下で自分自身が、そして船と船員たちがどう反応し、どこまで耐えられるか、どこまで自分の思い通りになってくれるのかが分かったということであろう。その意味では語り手は、一番知りたかったことを知ることができたと言える。物語の冒頭で語り手が強く感じていた二つのこと、即ち、“what I felt most was my being a stranger to the ship; and if all the truth must be told, I was somewhat of a stranger to myself” (93) に

対して、語り手はその不安を克服できたのだと読めるし、同じ時に語り手が自問した“how far I should turn out faithful to that ideal conception of one's own personality every man sets up for himself secretly” (94) に対して満足のゆく答えを見つけることができたのだと読める。

しかし、である。これらのことを確かめるために語り手は船と船員たちを不必要な危険に陥れたという一点に読者は目をつむるべきなのだろうか。コーリン島への異常接近が、嵐のような自然の猛威に対処すべくなされたのならともかく、レガットを上陸させるために、そこまで近づかなくてもよい距離にまで船を島に近づけたことを、船長にふさわしい勇気と決断力と呼ぶのは難しいだろう。しかも危機一髪の事態からの脱出を、船長の堅固な意志ではなく、麦藁帽がレガットの頭から落ちて水面に浮かんでいたという偶然に頼らなければならなかったというのは、船長の精神的成長を裏付けるにはあまりにも心許ないことではないか。

語り手は彼が個人的に抱えた問題を解消しようとして、船員たちや船の命を危険に曝す。そのような行動を取ろうとする発想自体が、冒頭から示唆されてきた語り手の自己中心的なものの見方と軌を一にするものである。結果、語り手の人間観、世界観に大きな転換が訪れたようにも思えないし、それを自己覚醒や精神的成長とも呼びにくい。通過儀礼の構図に沿って語り手は話を進め、最後に達成感を印象づけるのだが、にもかかわらず、そうやって達成されたものへの疑念を振り払うに十分な説得力を持たないのである。

また船長の一等航海士に対する行為も、レガットの殺人行為の反復であると、しばしば指摘されてきたのだが、ここでも船長の行為が単純に意味付けされ得ないという特徴が読み取れる。

船がコーリン島にぶつかりそうなのを目のあたりにして、もうおしまいだと喚く一等航海士に対して、船長はその腕を掴み、激しく揺さぶる。この行為によって船長はレガットのやったことを追体験していると考えられる。

船長のこの行為について、例えば Leiter は、それがレガットの殺人行為と照応関係にあることにより、自分を抑制できずに人を殺してしまったレガットと、自己抑制によって船を救い船員たちの尊敬を獲得できた船長

とが対比され、船長の道徳的優越性が明らかになったと考える¹⁰⁾。

このような解釈では、船長がレガットを媒体として、一旦は破滅の淵を覗き込んだ後、精神的により強くなり、自己抑制を身につけることができたとして、通過儀礼のテーマが単純明快に完結する。

しかし、本当にそうだろうか。船長がレガットと違い、自己抑制によって船を救ったと言っても、船を危機に陥れたのは他ならぬ船長自身であり、しかも意図的にそうしたのである。結果として船長がうまく船を操れて、船員たちが安堵の胸を撫で下ろしたことが、船長の道徳的優越性を裏書きするとも思えない。やはり通過儀礼のテーマは、ここでは理想的な軌跡を描かないのである。

いや、ここにはもっと大きな皮肉が秘められている。テキストの表現を改めて見てみよう。

I caught his arm as he was raising it to batter his poor devoted head, and shook it violently.

...

I hadn't let go the mate's arm and went on shaking it. "Ready about, do you hear? You go forward" — shake — "and stop there" — shake — "and hold your noise" — shake — "and see these head-sheets properly overhauled" — shake, shake — shake. (141)

船長の行為は、このように“shake”の連発によって強調されている。そしてそのために、わざとらしく思われぬか。この行為は、徒に航海士を怯えさせる、過剰な行為ではないだろうか。テキストの言語が印象づける、船長の異様なまでに執拗な反復行為、それはそれ自体の反復でもあり、レガットのやったことの反復でもあるのだが、それはその過剰性によって際立っている。そしてその過剰性は、その元になっているレガットの行為の過剰性をも、その内に映し出してはいないか。すなわち、この船長の模倣行為が、元のレガットの殺人行為について、犯す必要のない過剰な行為であったのかもしれないという読みを誘発するのである。

とすれば、レガットの行為を船長が反復することによって、読者は前者について新たな見方の可能性を示唆されているとも考えられる。船長が分身と見做すレガットの体験を追体験することによって、レガットが持っている性質を自らの内に取り込み、より十全な人間になるという解釈、あるいは Leiter のようにレガットの性質を克服することができたという解釈、これらはいずれもレガットが語り手の成長に寄与した側面にのみ注目した解釈である。しかしテキストの言語に注目すれば、語り手の表現が自らの行為の背後に元のレガットの行為までも照らしだしているのである。

このように、レガットの行為の反復という構造上の明快さは、しかしながら読みの明快さを生み出さない。物語のクライマックスで、緊張感に満ちた展開に引き込まれながら、読者はここでも船長の行為をどう捉えればよいのか判断する困難さを味わうことになるのだ。

最終的に船長はより成熟した人間になり、より船と船員たちと自分を理解した船長となったのだ、そしてレガットは船長の精神的成長に言わば触媒の役割を果たしたのだ、という議論が多い中で、Watts はここに述べた読者の味わう居心地の悪さに目を向ける数少ない批評家の一人である。

A large irony is that while Leggatt had thought it right to kill a man in order to save a ship and her crew, the hero thinks it right to imperil a ship and her crew in order to save a man.¹¹⁾

コーリン島への異常接近という語り手の行為と、それを正当化する判断は、語り手自身にとっては納得できるものであっても、読者には素直に受け入れがたいものであった。その語り手の行為のモデルとなっているレガットの行為は、一見すると Watts の言うように正反対の判断に基づいている。しかし語り手の行為がレガットの行為を反復しているために、語り手の行為及びそれを正しいとする判断が容易に納得できないものならば、同様にその元になっているレガットの行為及びその行為を正当化する判断も疑わしいものとして、再度光を当てられることとなる。そしてどちらの場合も、その判断が余りにも自己中心的で身勝手すぎるように思ってしまうのである。

Watts は続けて次のような論を展開する。

In so far as the narrative endorses Leggatt's conduct, it seems to commend a provocatively élitist and ruthless ethic.¹²⁾

レガットの行為を正当化する語り方が、読者に咀嚼しにくい倫理観を突きつけるのだと Watts は指摘する。そのような倫理観が、語り手が分身という虚構にしがみつ়くことから生まれてくるのは見てきた通りだ。ただし次に引用する彼の議論から分かるように、Watts は、語り手のレガットに対する見方がそのまま作品のメッセージとして読者に突きつけられていると考えているようである。

重要な問題点なので、長くなるが Watts の論を紹介しておこう。

Leggatt has killed a man while striving to set the sail. He believes himself to be entirely justified in his homicidal action, since the sail saved the imperilled ship. The hero of the tale, the anonymous young captain, promptly endorses Leggatt's view and successfully enables Leggatt to elude the laws of the land and of the sea. An unsavoury moral implication of the tale is clearly this: that some men constitute a bold élitist with the right to override long-established moral and legal principles. Such men, it seems, may justifiably commit homicide if the act coincides with the survival of a ship, and the justification is not one which needs to be presented in court. Conrad's 'sympathy with the outlaw' is evident; and the paradox is completed when we see that this outlaw believes that he was a better defender of 'order' on the *Sephora* than her own master.¹³⁾

Watts は確かに読者が戸惑う原因を言い当てている。しかしここで指摘されている倫理観は作者コンラッドの倫理観の反映と考えるべきなのだろうか。この倫理観は、コンラッドの他の作品、例えば ‘Heart of Dark-

ness' や *Nostromo* に読み取れる倫理観とは異なるものだと Watts 自身述べている¹⁴⁾。果たして読者はこのような倫理観を共有するよう要請されているのだろうか。

Watts の解釈は、語り手の見方が作者の見方と一致していることを前提としている。ここで私たちは、語り手と作者との距離を再確認しておく必要があるだろう。この論考の第一章で触れたように、この語り手は所謂「信頼できない語り手」のひとりと考えべきであった。とするならば、その語り手を通して全てが語られる物語において称揚されている価値観を、作者のものと単純に同一視することはできない。Watts の指摘する “provocatively élitist and ruthless ethic”, これは優れた者にのみ許された倫理観として語り手によって提示されるわけであるが、同時に挑発的なほどに自己を正当化し他者を見下した倫理観でもある。このような倫理観を、語り手が読者に訴えかけているだけでなく、作者も共感しているのだと Watts は言う。しかしコンラッドは作家活動のこの時点で、道德上の曖昧さ、善悪の判断のつけ難さを長く問題にしてきた作家である。しかもその問題を扱うために、‘Heart of Darkness’ や *Lord Jim* ではマールウという語り手を登場させ、個人的体験を意味付けることの困難さを身を以て示させ、また曖昧になることを承知の上で、表現と解釈に付き纏う限界を繰り返し語らせた作家である。そのような作家にあって、ここで表現と解釈に内在する問題に無自覚な語り手を登場させた上で、その語り手の倫理観を無批判に共有しているとは考えにくいのではないか。

だからここでは、作者が、読者に飲み込みにくい倫理観・人間観を無理に飲み込ませようとしているのではなかろう。読者は言わばその倫理観に対する判断の拠り所を与えられないまま放り出された状態にある。その曖昧さこそがこの作品に本質的に備わった性質だと言える。語り手がいくら分身関係を明白なものとして繰り返し主張しようとも、またレガットの行為に明快な解釈を施そうとも、そして最後に “the perfect communion of a seaman with his first command” (143) に到達できたと述懐しようとも拭い去れない曖昧さ、いや彼がはっきり主張すればするほど深まる曖昧さなのである¹⁵⁾。

結 語

語り手はレガットが自らの分身であるという見方に執着し、その見方から終始離れずに語り続ける。もし読者も分身関係を自明のことと受け入れて語り手の話に耳を傾けるならば、この物語は船長の語る時の流れに沿って進展し、最終的にレガットの脱出と船長の成長という形での解決をみる一直線型の物語として読めるだろう。そのような読み方を否定するつもりは毛頭ない。一直線型のプロットを持っているからこそ、レガットが発見されるのではないかという不安感や、コーリン島への接近における緊迫感を読者は語り手と共有することができる。

しかしこの物語は、通過儀礼としての危険な経験とその克服、緊張とその解消、といった構図だけでは捉えきれないのも確かなのである。そしてレガットが分身であるという語り手の確信、その上でのレガットの人間性と行為に対する極端な正当化は、レガットを倫理的に曖昧な存在にしてしまいがゆえに、語り手自身が施す解釈に全面的に共感するわけにはいかないのである。

最後に、語り手は作者の人間観を如何ほどに反映しているかという問題に立ち返るならば、語り手のものの見方を作者も共有していると考えるのが難しいのは、もはや明白であろう。これまで見てきたように、テキストが船長の見方を提示すると同時に、絶えず相対化する働きをする以上、レガット像を元にした、ある一つの人間観が称揚されているとは考えにくい。

“It was all very simple” —そう語り手は言う。しかし全てに明快な解釈を与えようと欲する語り手の、曖昧さを含まぬ物言いを裏切って、彼が伝える物語は曖昧さに満ちている。つまるところ、曖昧な存在である人間を前にして、読者が絶えず判断に迷うことこそが、この作品の人間観を反映しているのではないだろうか。

注

- 1) J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cam-

- bridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1982), p. 2.
- 2) Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (Harmondsworth : Penguin Books, 1985), Book II, Ch. 21, pp. 245 – 246.
 - 3) *Ibid.*, Book III, Ch. 9, pp. 342 – 345, Ch. 15, 403.
 - 4) Marvin Mudrick, 'Conrad and the Terms of Modern Criticism' in *The Hudson Review*, Vol. VII, No. 3 (Autumn 1954), p. 424.
 - 5) *Ibid.*, p. 425.
 - 6) 'The Secret Sharer', *Twixt Land and Sea* (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad, London : J. M. Dent and Sons, 1947), p. 120. 以下、このテキストからの引用は本文中にページ数を示す。
 - 7) この点については『コルヌコピア』第8号(1997)所収の拙論「翻弄される読者——‘The Secret Sharer’の語りについて」で詳しく論じているので、ご参照いただきたい。
 - 8) 語り手のものの見方の特徴についても、前掲の拙論で論じている。
 - 9) 例えば、Louis H. Leiter, "Echo Structures: Conrad's 'The Secret Sharer'" (*Twentieth Century Literature*, 5, 4, 1960. Rpt. *Joseph Conrad : Critical Assessments*, vol. III, ed. Keith Carabine. Mountfield : Helm Information, 1992), pp. 291 – 92; H. M. Daleski, *Joseph Conrad : The Way of Dispossession* (London : Faber and Faber, 1977), p. 182; Joan E. Steiner, "‘The Secret Sharer’: Complexity of the Doubling Relationship" (*Conradiana* 12, no. 3, 1980. Rpt. *Joseph Conrad Modern Critical Views* ser. ed. Harold Bloom, New York : Chelsea House, 1986), pp. 109 – 110 などがある。
 - 10) 前掲の Leiter pp. 292 – 293 参照。
 - 11) Cedric Watts, 'Introduction' to *Typhoon and Other Stories* by Joseph Conrad (The World's Classics, Oxford : Oxford University Press, 1986), p. xix.
 - 12) *Ibid.*
 - 13) *Ibid.*, p. xvii.
 - 14) *Ibid.*, p. xix.
 - 15) 最近のコンラッド論の中で、Billy も 'The Secret Sharer' の作者の語り手に対するアイロニカルな距離に触れている。"While 'The Secret Sharer' does unfold as a symbolic descent into the self, Conrad ironically alludes to the seductive and sedative illusions of Western civili-

zation, which support the myth of attaining self-knowledge and self-command. ... The narrator may believe he has achieved a kind of reintegration of the self as a result of Leggatt’s plunge, but this cannot be synonymous with authentic maturity. ... Conrad lures us to a door that remains closed ... and despite the triumphant note at the end leaves us grappling with a mystery rather than revelation.” (Ted Billy, *A Wilderness of Words: Closure and Disclosure in Conrad’s Short Fiction* (Lubbock: Texas Tech University Press, 1997, p. 27).